

これからの教師に求められる「アセスメント力」と「省察力・改善力」
～子供のリアルな姿を出発点とする、データとICTを活用した協働的な授業づくり～

徳島県教育委員会

義務教育課 石川 和義

1. はじめに

現在、学校現場は理想の教育と困難な現実の間で、大きな転換期を迎えています。文部科学省は、次期学習指導要領改訂に向けた「3本柱」として以下を提言しています。

- ・ Excellence（卓越性）：主体的・対話的で深い学びの実装
- ・ Equity（包摂性）：誰一人取り残さない多様性の包摂
- ・ Feasibility（実現可能性）：学習内容の構造化や授業時数の適正化により、教師と子供の双方に「余白」を生み出すこと

しかし、実際の教室を見渡せば、不登校児童生徒数の急増、いじめや暴力行為の増加、特別な支援を必要とする子の増加など、課題は極めて複雑化・困難化しています。このような背景をもつ子供たち一人一人に伴走し、その学びを最大化するためには、授業の在り方を「子供のつまずきをその場で捉え、即座に次の手立てを講じる『指導と評価の一体化』」へと転換させなければなりません。その核となるのが、「アセスメント力」と「省察力・改善力」です。では、いかにして「アセスメント力」と「省察力・改善力」を磨き、日々の授業で「指導と評価の一体化」を確実に実現していくか。その具体的なアプローチと、学校の学力向上の要である「学力向上推進員」の役割について述べていきます。

2. 「アセスメント力」の高め方

目の前の子供のつまずきを見落とさないために、「アセスメント力」を高めるには、全体を大きく見渡す「マクロな視点」と、個人の姿をじっくり見る「ミクロな視点」の双方を組み合わせることが重要です。

①「マクロな視点」を高める

毎年実施される「全国学力・学習状況調査」は、主観や経験だけに頼る授業から脱却し、学校全体の傾向を捉える大きな視点を与えてくれます。例えば、県全体として、評価の観点「知識・技能」に関する問題では成果が見られる一方、「思考・判断・表現」に関する問題には課題が見られ、全教科共通して「情報を取捨選択する力」や「論理的根拠に基づいた表現力」の不足が挙げられます。このように、データを通じてつまずきを客観的に捉えることが、アセスメントの第一歩となります。

②「ミクロな視点」を高める

データによる全体俯瞰に加え、日々の授業で1人1台端末を活用しながら、子供たち一人一人のリアルな様子をじっくり見つめる視点を連動させます。子供たちが「自分で問いを立てて動き出したか」「他者との話し合いを通じて自分の考えをどう深めたか」というような日々の授業プロセスにおける小さな変化や一瞬のきらめきを丁寧に見取ることが大切です。

3. 「省察力・改善力」の高め方

見取った姿を「明日からの授業改善にどう生かすか」という「省察力・改善力」を高めるには、評価を成績処理のためだけでなく、授業の「羅針盤」としていく必要があります。

①授業プロセスへの着目

ペーパーテストのみに頼るのではなく、授業中の子供の具体的な言動やつぶやき、表情の変化に目を向け、「これまでの教え方のどこに問題があり、子供はどこで立ち止まっているのか」と日々の授業設計を常に省察します。

②即座の手立てと柔軟な授業設計

子供がよい反応を示したり、深い思考に達したり、あるいは立ち止まったりした瞬間にすかさずアセスメントし、その場でのサポートや発展的な投げかけへと即座に授業を改善していきます。これにより、評価は、「今、この瞬間の子供のつまずきに気付き、即座に次の手立てを講じるための羅針盤」へととなります。

4. 職員室を「チーム」へ導く、学力向上推進員の役割（実践の一例）

子供たちの姿に基づいて授業を創り変える力を高めるといっても、それを先生方一人一人の個人的な努力や、孤独な営みにしてはなりません。ここで、先生方の一番近くで「実践のパートナー」として期待されるのが、「学力向上推進員」の存在です。一人で抱え込みがちな日々の授業づくりを、学力向上実行プランやICTといった具体的なツールを使いながら、いかにみんなで負担を減らし、ゆとりをもって進めていけるか。以下に示すのは、職員室の知恵を生き生きとアップデートしていくための学力向上推進員の役割とアプローチの一例です。自校の実情に合わせて、できることから柔軟に試してみてください。

・アプローチ例①：「学力向上実行プラン」を「お助けツール」にする

学校全体で策定する「学力向上実行プラン」を形骸化させず、日々の授業で困ったときに立ち戻れるツールとして機能させます。例えば、全国学力・学習状況調査や徳島県ステップアップテストの結果が判明する「中間期」に、データから見える子供たちの現状を共有する場を提案し、今の具体的方策が本当に実践しやすいものになっているかを話し合い、柔軟に見直していく実践的な研修をサポートします。

・アプローチ例②：ICTを最大活用した「スマートな授業研究」を提案する

校務の負担を減らし、前向きにアイデアを出し合えるよう、スマートな授業研究の工夫を職員室でシェアします。例えば、研究授業を端末やカメラで録画して共有し、他学年の先生も空き時間や放課後にいつでも視聴できるようにし、他の校務のために参加を諦めることがないようにします。また、授業中や授業後に気付いた「子供の具体的な言動やつぶやき」を、クラウドの共同編集シートに各自がその場で書き込める仕組みを作ります。授業後の研究会に向けて、子供たちのリアルな反応が可視化され、集計や準備の負担は大幅に軽減されます。

・アプローチ例③：「徳島型メンター制度Ⅱ」で相談の輪を広げる

学年を超えて気軽にお互いの知恵を貸し合える、気軽な相談の輪を広げていきます。指導案を一人の担任が抱え込むのではなく、みんなでパーツを持ち寄って一緒に創り、教材研究やデジタル環境の準備を分担することで、授業者一人が背負う負担感を軽減します。授業を見合う際にも、発問に対する「子供の具体的な言動や表情、つぶやき」をみんなで丁寧に捉え、「〇〇さんが見せたあの表情にはどんな意味があったのか（アセスメント）」「学力向上実行プランで掲げた『目指す姿』に近づくために、次はどう改善するか（省察・改善）」を、子供一人一人の反応や発話について、楽しく語り合えるような時間を、中心となって生み出していきます。

5. おわりに

子供と共に創り上げる創造的な教育の本質は、教師と子供たちとの人格的な触れ合いのなかにしか存在しません。とりわけ日々の授業は、教師の創意工夫によって生み出される極めて創造的なものであり、子供たちと共にその場で創り上げていくものです。次期学習指導要領に向けては、時間的なゆとりを生み出すための「調整授業時数」の導入のように、学校全体の工夫による「余白の創出」が大きく動き出しています。このような流れを追い風に、カリキュラムの精選やICTの活用によって日々の授業準備に追われる現状を打破し、自身の心に「余白」を生み出していくことも大切です。それによって、授業中に子供たちの心の機微やつまずきのサインを、ゆとりをもって捉えることができやすくなります。大きな視点（全国学力・学習状況調査のデータ）や、目の前の子供をじっくり見る視点（日常の見取り）によってアセスメント力を磨くこと。そして、その子供の姿から学び、即座に指導を修正していき、省察力・改善力を発揮すること。さらに、この一連の営みを教師一人で行うのではなく、職員室の「チームでの協働」へと広げていくことで、学校全体の教育力は本当の意味で高まっていきます。子供たちの「実際の姿やリアルな反応」を大切にしたい授業を目指し、データや子供たちの生の反応を上手に生かし、「指導と評価の一体化」を確実に実現しながら、子供一人一人の学びを最大限に引き出す伴走者として、これからも仲間とともに授業をアップデートしていきましょう。

【参考資料】

- ・「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について～全ての子供たちへのよりよい教育の実現を目指した、学びの専門職としての「働きやすさ」と「働きがい」の両立に向けて～（答申）：文部科学省（令和6年8月）
- ・教育課程企画特別部会 論点整理：文部科学省（令和7年9月）
- ・とくしま教員育成指標<改訂版>：徳島県教育委員会（令和7年3月）
- ・徳島型メンター制度Ⅱ：徳島県教育委員会（令和7年3月）
- ・令和7年度「学校力向上コラボレーション事業」第1回連絡協議会資料：徳島県教育委員会（令和7年4月）
- ・令和7年度「学校力向上コラボレーション事業」実施報告書：徳島県教育委員会（令和8年3月）
- ・学校の組織力を高め、教師の成長を支える取組とこれからの教師像～徳島県「学校力向上コラボレーション事業」の実践と教育委員会の役割～：令和8年度義務教育課 担当指導主事研修会資料（令和8年4月）
- ・令和8年度学力向上実行プランの作成要領：徳島県教育委員会（令和8年4月）